

概 要
<p>第 17 回 市民と市長の対話ひろば ～もりりと語ろう、宝塚市の未来～            テーマ：地域共生社会の実現に向けて            ～宝塚福祉コミュニティプラザを、すべての人が集い交流し、            多様性を認め合う福祉の拠点に～</p>
<p>日時：令和 8 年 2 月 8 日（日） 午後 2 時～午後 4 時            場所：総合福祉センター ホール            参加者：22 名            出席者：            森市長            認定特定非営利活動法人 こむの事業所 代表理事 松藤聖一 さん            健康福祉部－佐伯部長            健康福祉部総括担当及び安心ネットワーク推進担当－松本次長            健康福祉部福祉推進担当－坂田次長</p>
<p>《市長のテーマ説明》</p> <p>1 趣旨</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・売布東の町にある宝塚福祉コミュニティプラザ周辺を、地域福祉の拠点として充実させたいと考えている。</li> <li>・具体的な内容は未定であり、市が一方的に決めるのではなく、市民の意見を踏まえて考えていきたい。</li> </ul> <p>2 宝塚福祉コミュニティプラザの概要と経緯</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・当該エリアは、阪神・淡路大震災後のボランティア活動の高まりを契機に、市民が財団を設立して整備され、昨年、市、社会福祉協議会、NPO 法人へ寄贈された。</li> <li>・現在は、社会福祉協議会がボランティアプラザを運営している「ぶらざこむ 1」、市の公共施設である大型児童館と老人福祉センターの複合施設「フレミラ宝塚」、認定 NPO 法人こむの事業所が就労支援事業所等を運営している「こむの事業所」の 3 施設に複数の機能が集まっている。</li> </ul> <p>3 拠点づくりの基本的な考え方</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・このエリアの基本コンセプトは、「すべての人にとって暮らしやすい社会を、市民の力でつくること」であり、この理念を継承していきたい。</li> <li>・今回の拠点づくりは、これまでの理念を継承し、発展させるため、不足する機能、必要な機能を強化するものである。</li> </ul> <p>4 地域福祉と地域共生社会</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・地域福祉とは、年齢、性別、国籍、<sup>がい</sup>障害の有無、経済状況などを問わず、地域で暮らすすべての人が安心して生活できるようにするしくみづくりである。</li> <li>・社会福祉法第 4 条で、地域福祉の主体は地域住民であると定義されており、市民一人ひとりが中心となる。</li> <li>・地域共生社会とは、人や資源が世代や分野を超えてつながり、暮らしと生きがいを共につくる社会である。</li> </ul> <p>5 地域福祉拠点に求められる主な機能</p>

- ・地域課題の解決に向けた取組の推進。
- ・日常的なつながりを強化するための交流・ネットワークづくり。
- ・困りごとを抱える人への支援や相談体制の充実。

#### 6 具体的な機能イメージ

- ・地域づくりを支援するための機能。例えば人材育成やネットワーク形成の場。
- ・相談支援につながる機能。例えば市だけでなく、市民や関係団体等による相談の場。
- ・住民参加を支援する機能。例えば誰もが参加しやすい環境づくりや活動の場。

#### 7 売布東の町地域における福祉の拠点づくりへのご寄附と覚書

- ・寄付者との覚書では、社会的包摂の具現化と多様性を尊重する場とし、年齢や性別、国籍、障碍の有無に限らず、子どもから高齢者まで、すべての人が集い交流できる場とし、ユニバーサルデザインに配慮することとした。
- ・また、覚書では市の責務として、宝塚福祉コミュニティプラザを「宝塚市の福祉の拠点」とし、機能の充実に努めるものとした。

#### 8 今後の進め方と市民への呼びかけ

- ・次年度以降、体制を整え、市民とともに具体的な検討を進めていく。
- ・市の厳しい財政状況を踏まえ、ご寄附をいただくとはいえ建物の集約や縮減も含めて検討する。
- ・まだこれから検討するものであり、必要な機能や不要な機能も含め、率直な意見を出してもらいたい。

#### 《松藤さんの説明》

##### 1 フレミラ宝塚・福祉コミュニティ施設の成り立ち

- ・フレミラ宝塚や関連施設は、整備段階から市民参加の話し合いやワークショップを重ね、多様な意見を反映してきた結果、多くの人が集う場となっている。

##### 2 阪神・淡路大震災と地域の気づき

- ・1995年の阪神・淡路大震災では、当日の朝、倒壊家屋からの救助に当たったのは近隣住民が多かった。そういった体験を通じ、行政や専門機関が十分に機能しない状況下では、近隣住民による助け合いが最も重要であることを痛感した。

##### 3 ボランティア活動と支援の広がり

- ・震災時には全国からボランティアが集まり、救援物資の仕分けや炊き出しなどの支援活動が展開されたが、実際に現場を支えたのは市民主体のボランティアであった。

##### 4 震災前からのネットワーク形成

- ・震災の半年前に実施したボランティアフェスティバルを通じ、分野を超えた人と人のつながりが形成されていたことが、震災時の迅速で継続的な支援活動につながった。

##### 5 宝塚市に根づく市民活動の歴史

- ・宝塚市は戦後からボランティアや市民活動が盛んな地域であり、こうした歴史的背景が震災時の支援や現在の地域福祉の基盤となっている。

##### 6 福祉コミュニティプラザの設立経緯と役割

- ・福祉コミュニティプラザは、行政、ボランティア、事業活動が重なり合う拠点として整備され、地域福祉を支える中心的な役割を果たしている。
- ・この場所には震災後に188戸の仮設住宅が建っていた場所。創設者が震災時のボラ

ンティア経験から、ボランティアが集う場の必要性を感じ、整備された経緯がある。

#### 7 障害者就労支援事業の取組

- ・清掃業務やレストラン運営などを通じ、障害のある人の安定した就労と社会参加を支援しており、地域に根差した事業として発展してきた。

#### 8 行政・ビジネス・ボランティアの連携

- ・地域福祉は、ペストフの福祉トライアングルにあるように、公共サービス（平等）、ビジネス（自由）、ボランティア（博愛）が重なり合って形作っている。売布には、公共サービスである「フレミラ宝塚」、ビジネスである「こむの事業所」、ボランティアセンターの「ぷらごこむ1」と3つの要素が集まっている。
- ・昔は、地域や家族の力が大きく、行政の役割は補完的だったが、現在は地域や家族の力が弱まり、ニーズだけは増えている。行政だけでは支えられない部分を、地域の協働でカバーしていく必要がある。特に、行政の性質である「公平性・合理性・継続性」は行政の事業を制限するが、ボランティアは真逆の「非公平性・非合理性・非継続性」で動くことができる。できる相手に、できることを、できる間だけやる、この柔軟性が行政と相互に補完し合うことが、これからの地域福祉に不可欠である。

#### 9 今後に向けて

- ・福祉コミュニティプラザの今後のあり方については、市民から忌憚のない意見を広く集め、行政と市民が共に考え続けていくことが重要である。

#### 《対話》

##### 1 参加者【誰もが参加できる運動の場づくりについて】

- ・視力障害の立場から、リハビリやダンスなど体を動かせる場所が欲しい。視力障害者協会で行っている「STT（サウンドテーブルテニス）」を現在は福祉センターで実施しており、一般の人も参加し、楽しめる。STT を広く市民に紹介することで、障害の有無に関わらず集える運動の場を作ってほしい。

##### ➡ 市長

- ・障害者スポーツは障害者だけのものという誤解があるが、いろいろな種類があり、健全者も一緒に楽しめる。「みんなで楽しむ」ことを目的に体を動かす場をつくるということの良いアイデアと思う。

##### 2 参加者【新拠点における人が集う場づくりと運営について】

- ・以前、テニスコートがあり、夕暮れコンサートを行っていた経験から、多くの人が自然に集まる場所であることが重要。
- ・建物（箱）を作るだけでなく、適正に運営できる人・組織が誰なのかを事前に考える必要がある。寄附者が建物を整備する予定だが、完成後の運営主体を明確にした上で進めてほしい。

##### ➡ 市長

- ・スポーツと同様に、音楽やコンサートを通じて人が集う場は重要なアイデア。
- ・運営の継続性には課題があり、特定の個人に依存する「属人的運営」からどう脱却するか、継続性をどう担保するかが重要な論点である。

##### ➡ 松藤さん

- ・必要だと本気で思う人が数人いれば、事業は必ず継続・実現できると確信している。強い意志と仲間が存在が、困難を乗り越え継続につながる。自身がいなくなっても、仲間と仕組みがあれば事業は続く。
- ・ワークショップを通じてニーズを明確にし、主体的に運営するグループが生まれることが重要。また、レストラン事業を例にあげるが、ビジネスとして成り立つ基盤を持つことも重要。
- ・寄附文化やファンドレイジング、ビジネスとの連携による運営モデルの可能性も提案したい。

➡ 市長

- ・地域の人に戻ってこられる拠点であることが重要。また、冷たい見方かもしれないが、冷静なビジネスモデルが必要。熱意との両輪である。
- ・コミュニティプラザとしての継続には、市として一定の責任を持つ必要があると認識している。
- ・新しいアイデアや人材を受け入れる開かれた雰囲気づくりが必要。

3 参加者【福祉施設は「誰でも使える場所」であるという市民への周知について】

- ・福祉地域に建物ができると、「<sup>がい</sup>「障害者や高齢者だけの施設」と誤解し、一般市民が利用できないと思っている人が多い。災害時などは誰でも行ける場所であることを、もっと市民に分かりやすく伝えてほしい。
- ・「福祉」という言葉がつくことで、自分とは無関係だと感じる市民が多い現状がある。社会福祉協議会や<sup>がい</sup>障害福祉課の存在を知らない市民も多く、困った時の相談先が伝わっていない。市として積極的な広報・周知を行ってほしい。

➡ 市長

- ・そのとおりだと思う。レストランこむずは、福祉に関係なく利用されている。

➡ 松藤さん

- ・過去に「車いすガイドブック作り」を通して、市民・学生・行政職員など多様な人が目標を共有すると大きな力が生まれた経験をした。行政が主導するのではなく、市民の「やりたい」という気持ちが行政やボランティアを動かす。ボランティアの高齢化が進む中、現役世代に余暇活動としてのボランティアを楽しんでほしい。新しいボランティアの在り方が重要である。
- ・夏祭りなど、市民が集まりやすい企画を再び行うこともいい。ただし、企画・運営・資金集めを誰が担うのが課題である。

➡ 市長

- ・福祉と聞いて、「支援はいらない」と思う人も多いが、そういう人こそ施設に来てもらうことで、気づきやボランティア参加のきっかけになる可能性がある。
- ・例えばフレミラなどでは、子育て世代など一般市民が入りやすい施設運営の工夫は一定進んでいるが、エリアとしてはまだまだである。新施設整備の機会に、より多くの人を引き込む工夫は必要。

➡ 松藤さん

- ・フレミラ整備時、世代間交流や市立中学校の文化系クラブ活動の受け皿としての構想があった。高齢者の知恵や経験を子どもたちに伝えるなど大規模なボランティア活動

の場を構想していた。できなかった計画もあるが、今後も可能性を模索したい。

➔ 市長

- ・現在、部活動の地域移行は市の課題の一つである。新施設の機能として検討してもいいかもしれない。

4 参加者【福祉コミュニティプラザの在り方と民間連携・活用アイデアについて】

- ・福祉コミュニティプラザについて「広大な敷地や駐車場があり、使われ方がもったいない」と感じていた。公共施設の建て替えや維持について、より慎重で将来を見据えた検討が必要である。
- ・阪急阪神など民間企業と連携し、住宅化や賃貸活用なども検討できるのではないか。
- ・地域には防犯や公園管理などのボランティアが多く存在しており、そうした人たちが集い、意見交換できる場があると良い。
- ・市役所食堂は大変魅力があると感じた。コミュニティプラザ内のレストランと相互にPRすることで交流が生まれるのではないか。

➔ 市長

- ・民間連携の重要性についてそのとおりである。阪急電鉄をはじめとする民間との連携を重視していく考え。
- ・宝塚福祉コミュニティプラザは創設者によって整備されたもので、市は敷地などの寄贈を受けた。また新しい拠点整備にもご寄附をいただけることになっており、財政的には市にとってプラスである。
- ・今後は公共施設の集約や効率化を進めるとともに、施設や機能そのものの見直しもできればと思う。まずはどんな機能が必要なのかから取り組む。

➔ 松藤さん

- ・レストラン利用者は多く、非常にありがたい状況である。宴会やパーティー利用も増えており、15年間のスタッフの努力と市民の支援の成果である。
- ・A型事業所として、土地・建物・設備が確保されれば、障害のある人の安定した雇用を生み出せる。
- ・ヨーロッパのソーシャルファームなど、就労による社会参加の意義が大切である。障害のある方も、支援される側から納税者になることができる。
- ・福祉コミュニティプラザが、仕事・余暇・文化・スポーツを含む楽しい拠点になることを期待している。

➔ 市長

- ・市役所食堂やコミュニティプラザ内レストランが一般市民に支持されている。今後はうまく宣伝できるよう後押しを検討したい。
- ・新たな提案として、障害者雇用のひとつに「農」との連携があり、宝塚の農地を活かした就労や活動の可能性も考えたい。

➔ 松藤さん

- ・西谷地域の農家と連携し、作物栽培や学校給食への提供を行っている。農業は過酷だが、今後ますます重要になる分野である。
- ・耕作放棄地が増える中、障害のある人、ボランティア、子どもと一緒に関わる「農福連

携」の可能性がある。農と福祉、ボランティアを組み合わせることが、日本の将来を支える大切な一歩になると考える。

#### 5 参加者【福祉施設の集約化と保護司サポートセンターの環境改善について】

- ・施設が分散していることでコストがかかっており、今後は集約化が進むと理解しているが、その中で、現在の総合福祉センターが今後どうなるのか聞きたい。
- ・保護司として活動しているが、福祉センター1階にある保護司サポートセンターの環境に課題を感じている。

##### ➡ 市長

- ・新しい福祉の拠点を整備することから、施設集約化の議論の中で、総合福祉センターは検討対象の一つと考えている。ただし、建物ありきではなく、「どのような機能が必要か」を先に整理することが重要である。単なる建物削減ではなく、機能の縮小・拡大・転換も含めて再検討すべき時期である。
- ・保護司サポートセンターの環境についても課題として認識しており、今後の検討材料としたい。現時点では具体的な結論は出ていないが、問題意識は共有している。

##### ➡ 松藤さん

- ・今後の施設整備では、「施設同士が融通し合う」という考え方を基本原則にすべきである。例えば、調理室等の特定目的の機能は、隣接する施設には重複して作らず相互利用するほうがよい。調整が難しいこともあるが、検討しては。
- ・コミュニティプラザは、駐車場が施設ごとに分断されている現状があり、共用化が進んでいない課題がある。こうした具体的な課題を解決することで、施設全体がより生きてくる。
- ・機能が集まるからこそ、共用・連携を前提とした仕組みづくりが不可欠。
- ・市が土台づくりを担い、社協や関係団体が実践を担う形が望ましい。

##### ➡ 市長

- ・施設が近接する意味は「共用」にある。「自分たちの施設」という発想ではなく、市民全体の共有財産として使う意識が必要である。

#### 6 参加者【新施設と隣接地を一体的に活用する提案について】

- ・予定されている新施設用地は、現在の建物よりもかなり狭いと認識している。隣接する「お花畑」の看板が出ている花壇と新施設をセットで考え、有効活用すべき。花壇は現在、中心となる担い手が不在で、十分に活用されていない現状がある。
- ・障碍のある人が清掃などの仕事を担っている事例があり、施設と周辺環境を連動させた活用の可能性がある。
- ・寄附者は長年にわたり障碍者支援に尽力してきた人物であり、その思いを反映した施設づくりを望む。せっかく整備しても、活用されなければ意味がない。そのためにも、現在の花壇と一体で考える必要性がある。

##### ➡ 市長

- ・寄附者の意向は尊重するが、地域の皆さんが話し合っ方向性を決めていくもの。地域福祉の方向性は、市民同士の話し合いを市が後押しする形で決めていくべき。
- ・花壇についても複数の活用案が出ており、新施設と一体で考える際の動線や区切り方

など、課題を整理しながら検討していく。

➔ 松藤さん

- ・花壇の一部は、車椅子利用者が園芸活動を行えるよう設計されているが、その趣旨が十分に活かされていない現状がある。
- ・寄附者の原点の思いに立ち返り、やりたい人に機会を与え、実現できる環境づくりが重要。

7 参加者【インクルーシブな市役所体制と共生社会実現の仕組みについて】

- ・市長が述べた「市民インクルーシブ」「ソーシャルインクルーシブ」の考え方について、4月から設置予定の課は、明石市の「インクルーシブ推進課」ように庁内横断で連携する部署を想定しているのか。今も障害福祉担当は忙しそうなので、職員の負担が増えるのではと思った。市長のイメージを確認したい。
- ・新施設は共生社会をテーマにしているが、場所を作るだけでは自然な交流は生まれない。多数派（マジョリティ）と少数派（マイノリティ）ではスタート地点が異なるため、「公平性」の考え方が重要と考える。聞こえない立場から、手話を通じた自然な交流の場づくりを例に挙げ、具体的なイメージを質問したい。

➔ 市長

- ・明石市と同じ形の組織体制は現時点では想定していない。本来インクルーシブ推進は、市職員全員が持つべきと考える。また、過去にもこのエリアでの施設建設の案があったと聞いている。理念だけを掲げて途中で頓挫することを避け、実行力のあるプロジェクト型の組織が必要と考えている。今日も健康福祉部が出席しているが、ご意見のとおり業務が多い部である。施設整備には別の専門性も必要なため、専属的に進める体制を検討している。
- ・将来的にインクルージョンを専門に扱う部署や担当者を設ける可能性は否定せず、今後の検討課題としたい。
- ・手話教室や障害者スポーツ自体は良い取り組みだが、「学ぶこと」が目的になると長続きしにくい面もある。大切なのは、別の目的で集まった人たちが同じ空間・同じ活動を自然に共有することだと考える。市民と市長の対話ひろばで、手話通訳や要約筆記が当たり前にある状況のように、自然なインクルージョンの姿が大切。
- ・障碍の有無、年齢、国籍に関わらず「誰でも楽しめる」ことを施設の前提条件にする必要がある。一方で、相談機能など行政として担うべき役割は、施設内にきちんと整理して配置する必要もある。

8 参加者【共生社会を支える移動手段・交通アクセスの確保について】

- ・多数派と少数派の議論の中で、「さらにその中のマイノリティ」が施設へどうやって行くのが最も重要な課題である。高齢者や、こむの事業所周辺から遠い地域に住む人にとって、施設へのアクセスが大きな課題である。どれほど良い施設ができて、「行けなければ意味がない」ため、施設整備とあわせて、交通・移動手段の確保を重要なテーマとして検討してほしい。

➔ 市長

- ・同意するが、交通手段は非常に重要かつ難しい課題である。宝塚市は山が多く、運転手

不足やバス事業者の事情により公共交通の確保が厳しい現状がある。

- ・福祉コミュニティプラザの立地は、幹線道路、主要バス路線、JR・阪急駅に比較的近いという利点がある。それでもすべての移動課題が解決するわけではなく、交通問題は市全体の課題として継続的に検討する必要がある。すぐに解決できる問題ではないが、重要課題として常に意識し、解決に向けて努力していきたい。

#### 9 参加者【市民理解を広げる啓発と、誰もが集える福祉拠点の活用について】

- ・当事者の立場から、宝塚市が生活しやすいまちになるためには、市民全体の理解が不可欠である。
- ・新しい施設は、市民が集う場であり、福祉や障<sup>がい</sup>碍について啓発できる拠点になると期待している。施設は「知られていなければ意味がない」ため、イベント等を通じて市民に広く認知され、気軽に来られる場所にしてほしい。例えば末広公園はイベントも多く、市民の認知度は非常に高いと思っている。
- ・フレミラやぷらごこむ 1 があまり知られていない現状に課題意識を持っており、市としての工夫や企画の考えはあるか。

##### ➡ 市長

- ・福祉に馴染みのない市民が日常的に訪れることで、理解が深まるという考えはもっともだと思う。
- ・祭りやフェスタ、運動会など、市民全体が参加できる催しは有効であり、新しい施設ができるのを待たなくても取り組めると考える。
- ・昨年このエリアを承継するまでは、市の関与が薄かった傾向もあるため、今後は市としての関わりを大きくしていきたい。とはいえ、市が前に出すぎるのはよくないと思っているので、市民の皆さんとともに 新施設を「拠点」としてどう活用するかを、市としてしっかり考える必要がある。

#### 10 参加者【ノンステップバス導入による誰もが使いやすい交通環境の実現について】

- ・現在の宝塚市内のバスは段差が高く、高齢者、障<sup>がい</sup>碍者、乳幼児連れにとって利用が困難な状況である。福祉施設前にバス停があるにもかかわらず、ノンステップバスが走っていない。1 時間に 1 本でもよいのでノンステップバスの運行を検討してほしいと強く要望したい。

##### ➡ 市長

- ・重要な課題として認識している。バス運行は市単独で決定できないが、阪急バスには要望を伝える。売布の施設を運行している路線は、1 便あたりの乗降客数は他の路線に比べ少なく、山手の地域も走行することから、道路が狭いこともありノンステップバス導入の難しさにつながっている可能性がある。
- ・交通問題全体と同様に、今後も継続して検討すべき重要課題として受け止めたい。

##### ➡ 松藤さん

- ・過去に宝塚市が、駅のエレベーター設置やノンステップバス導入のため、阪急バスに補助金を出してきた経緯がある。道路構造の問題はあるが、バス技術は進歩しており、改善の余地はあると考える。
- ・福祉は「個人の困りごと」から始まるものであり、当事者の声を伝え続けることが重要。

本日の発言は非常に貴重であり、今後の施策検討につながる意見だと感じた。

11 参加者【施設整備における当事者参加とバリアフリー設計について】

- ・これまでの公共施設整備では、完成後にバリアフリーや合理的配慮を求めても「もう遅い」と断られた経験がある。施設は「できてから対応」ではなく、設計段階から当事者が関わり、意見を反映できる仕組みが必要である。
- ・当事者の意見はわがままではなく、「共生社会」を実現するために不可欠な視点であり、役割だと考えている。事前の調整と、適切なタイミングでの意見反映を、スピード感を持って進めてほしい。

➡ 市長

- ・指摘のとおりであり、施設整備は設計・デザイン段階で決めなければならないことが多い。市立病院や福祉コミュニティプラザの新施設整備においても、同様の課題がある。
- ・スケジュール管理や意思決定は市側が主体的にコントロールすべき点であり、「後からできなかった」という事態を防ぐ意識を常に持ちたい。今後は、事前段階からの配慮を重視して進めていきたい。

12 参加者【公共施設整備における事後報告の是正と当事者参加について】

- ・公共施設整備において、決定後の事後報告が常態化している。説明や合意がないにもかかわらず、「すでに承諾を得ている」とされるケースもある。建築の専門知識はなくとも、設計図（青写真）を描く前段階で当事者や関係団体に説明・意見交換を行うべきである。
- ・阪神・淡路大震災後の阪急伊丹駅再建において、当事者参加によって設計を修正し、誰もが使いやすい駅が実現した実例がある。当事者参加は時間も手間もかかるが、後からの不満や修正を減らせる、当事者自身も納得感を持てるという点で非常に重要である。
- ・条例や基準を満たしているだけでは不十分で、実際の使いやすさは当事者でなければ分からない。新しいコミュニティプラザでは、設計を修正できる段階で必ず当事者の声を聞いてほしいと強く要望する。

➡ 市長

- ・市内部では、福祉部門と建築部門など、部署間の調整が難しい実情があるが、指摘のとおり、当事者の意見を早い段階で聞く必要があると考える。
- ・当事者とは障害者に限らず、さまざまな立場の市民を含め、幅広い意見を聞きたい。
- ・現在はまだ設計前の段階であり、今回の対話もこのタイミングで実施した。今後も一度きりで終わらせず、後悔のないよう市がスケジュール管理を行いながら意見を反映していきたい。

13 参加者【外国人マイノリティに配慮した環境づくりと「やさしい日本語」について】

- ・国際交流文化センターでは外国人向けの活動が行われている一方で、福祉コミュニティプラザやフレミラなどに外国人マイノリティが自然に集えているかは疑問である。
- ・外国人とのコミュニケーションでは、専門用語や難しい表現ではなく、「やさしい日本語」が非常に有効であると実感している。新しい施設や建物を整備する際には、短く、はっきりと、最後まで言い切るといった分かりやすい日本語表現を掲示物・案内・パン

フレットで徹底してほしい。

- ・外国人も含めたマイノリティが安心して利用できる環境づくりを進めてほしい。
- ➡ 市長
- ・国籍を含めた多様性を意識しているのは事実であり、その具体化が課題だと認識している。「やさしい日本語」の活用や、宝塚市内に住む外国人の主な使用言語を把握した上での配慮は重要な視点である。
  - ・掲示・案内方法だけでなく、必要に応じて多言語対応も検討対象になり得る。国際交流文化センターや国際交流協会など、外国人当事者に関わる組織と連携しながら進めていきたい。
  - ・外国人も一つの「当事者グループ」として位置づけ、今後の検討に反映していきたい。

#### 《松藤さんまとめ》

福祉コミュニティプラザは「社会的排除をしない場所」とされている一方で、実際には二つの「排除」が起きている。

一つ目は、福祉コミュニティプラザの設立当初は、利用者のひとりであった知的障<sup>がい</sup>碍のある人たちが、本人の意思ではない理由により、現在はその場から移転してしまっている点である。

当初は、利用者数が増え、他の利用者と交わる中で、ぶつかるなどのトラブルも起きたが、それも含めて「共生社会」であり、非常に大切な交流の場であった。

特定の法人の復帰を求めているのではなく、障<sup>がい</sup>碍のある人、特に知的障<sup>がい</sup>碍のある人が、再び「日常的に活動できる場所」を盛り込むことを目指してほしい。

二つ目は、そもそもその場所に来ることができない人たちがいるという問題である。特に、医療的ケアが必要な人は、福祉コミュニティプラザでほとんど見かけることがなく、日常の活動の場や、災害時の避難の場も含めて、社会的に排除されている状況に近いのではないかという懸念がある。そのうえで、医療的ケアが必要な人たちが日中活動や社会参加ができる場をどうつくるかを、関係者と一緒に考えていきたい。